

## 2025.1.22 キャンドル・メッセージ HANWA 声明文

核兵器禁止条約発効4周年の今日、1月22日、1500本のキャンドルの灯で、「核と人類は共存できない」「NUCLEAR & HUMANITY CAN'T COEXIST!」と描き出し、亡き核犠牲者の魂と共に、原爆ドームの前から世界に呼びかける。

2021年1月には、核兵器禁止条約が発効し、核時代の終焉の一步を刻んだ。来る3月には核兵器禁止条約第3回締約国会議を迎える。核兵器の違法性と核被害者の救済の義務を定めたことは評価に値する。今世界は、3年近く続く泥沼化したウクライナ戦争、パレスチナ・ガザで1年3か月余も続いたジェノサイドに続きイスラエルの飽くなき領土拡大の野望による中東危機の中で、ロシア、イスラエルによる核兵器使用の威嚇が繰り返され、今や人類を核戦争の危機にさらしている。世界戦争の火種を消し止めなくてはならない。

核兵器禁止条約は、核戦争による非人道性の極みを訴え闘ってきた原爆被爆者、核実験被害者たちの体験とそれを共有する運動の上に成立した。しかし、世界各地の核被害者の救済なくして核廃絶はないという被爆者らの訴えに反し、核被害者を「核兵器の使用と実験」によって影響を受けた者と狭く定義づけられているため、多くの先住民を含む核被害者が切り捨てられている問題がある。また、原子力の「平和利用」を奪い得ない権利と定めていること、加害者責任が明確にされていないことなどの致命的な問題もあり、今後の重要な課題として、ヒロシマから声を挙げて締約国会議などで取り組んで行かなくてはならない。

現実化する世界核戦争の危機にあって、2024ノーベル平和賞は日本被団協に光をあてた。未曾有の非人間的極致の無差別大量虐殺の汚点を人類の歴史に刻んだアメリカの原爆投下による辛酸を舐めながらも、生き残ったヒバクシャは無念の死者たちを背負って立ち向かい闘ってきた。ノーベル平和賞は、築き上げてきた核のタブーが根幹から揺さぶられている現況に楔（くさび）を打ち込もうと世界に呼びかけるものであった。

核の時代は、米国が広島・長崎に原爆を落とし、人間が地上から人類を抹殺する力を手に入れ、人類が滅亡の危機に直面して始まった。原爆投下は、一瞬にして無数の無辜の民を虐殺し、ヒロシマ・ナガサキに未曾有の非人間的悲惨さの極みをもたらした。地獄の惨禍をくぐり抜け生き延びてきた被爆者は、放射能の影響に今も苦しんでいる。

この間、核を握る核権力によって、放射能による健康への影響の事実は矮小化され、あるいは隠蔽されてきた。黒い雨や放射性降下物に曝された被爆者は今なお国に認定させるための訴訟を起こさねばならない状態にある。

核利用サイクルはウラン採掘に始まり、精錬、核兵器・核燃料製造、核実験、核兵器使用、原発稼働、原発事故、使用済み核燃料の再処理、核廃棄物の保管・処分、劣化ウラン兵器使用など、あらゆる段階で放射能による広範な環境汚染と人体への深刻な影響をもたらしてきた。

核の利用が、軍事利用であれ、商業利用であれ、深刻な放射能被害をもたらし、地球を破滅に向かわせるものであることは、引き起こされている現実が明らかにしている。放射能汚染は永遠に続く。人類は核エネルギーの利用を完全に放棄しなければ未来を失う。

「核と人類は共存できない」における「核」とは、「核兵器」だけではない。

私たちは、広島、長崎被爆80周年に当たり、核利用がもたらした非人間的な核災害の原点・ヒロシマで「核と人類は共存できない」という核絶対否定の理念を掲げ、核兵器を廃絶し、核利用を根絶するため、10月5、6の両日、広島市で世界核被害者フォーラムを再び開催する。

2015年核被害者フォーラムの成果を引き継ぎ、世界の核被害者への救援、核被害者の権利と補償の確立、核利用の根絶への指針として世界に広めていく。

2025世界核被害者フォーラムの広島開催で世界の核被害者の苦闘に光を！

私たちはヒロシマから世界に繰り返し訴える！

中東、東欧の戦火拡大の危機を止めよう！ 民衆の命の灯を消させない！

核がある限りヒバクシャは増え続け、核戦争の危機をもたらす！

核時代に終焉を！

2025年1月22日

核兵器廃絶をめざすヒロシマの会

共同代表 足立修一 森瀧春子